

聖書: エステル記8章9～17節

説教: 救いの知らせ

はじめに

クセルクセス王の側近であったハマンが、ペルシャ帝国に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにしようとする法令を發布したとき、エステルとササにいるユダヤ人は三日間断食して祈り、三日目にエステルはいのちをかけて王の前に出て、身を低くしながら王にあわれみを乞い求めていきました。ちょうどそのとき、王が年代記を開いて読んでいると、大きな手柄を立てたモルデカイにまだ栄誉が与えられていないことを見つけ、それがハマンのしわざではないかと疑い始めます。そんなとき、ちょうどその日に開かれた宴会の席で、エステルの口から、「ハマンこそ王に逆らう悪人です」と告げられたとき、王はハマンの裏切りを確信する。これを聞いていたハマンはあわてふためき、命乞いをするために王妃が座る長椅子に座ってしまい、そこを王に見とがめられ、結局彼は王に逆らっただけでなく、王妃を侮辱したという罪で自分が立てた柱につるされてしまいます。

しかしこれで問題が解決したわけではない。ハマンが出した法令はまだ力をもったままなのです。それでエステルがもう一度、身を低くし、泣きながらハマンが出した法令が無効となるように新たな詔書を出していただきたいと願い、これを聞いた王は、新たに側近に取り立てたモルデカイに、自分の指輪を渡し、自分とたちの思うとおりのことを書き、王の名前で詔書を出してよいと語ってくれた。これが前回までのあらすじです。今日はその続きで、モルデカイがどのような詔書を書いたのか。その内容を見ていきながら、これが私たちの救いとどう関係があるのか考えて参ります。

1 詔書

1) 王の指輪で印を押した

8節後半に、「王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができない」とあります。ハマンはユダヤ人を根絶やし偽よとの法令に王の指輪で印を押していただき、王でさえ後から取り消すことができません。ではどうするか。トランプのカードに似ていて、先に出した法令よりもさらに強い内容の法令を新たに出すことで、先の法令が事実上意味がなくなるようにする。実際にどんな内容の法令を出したかは、また後で見えていきます。

2) 各民族の言語と文字で書かれた

その前に、この法令がどのようにしてペルシャ帝国の隅々にまで送られていったのかを確認しておきます。9節。「そのとき、王の書記官たちが召集された。それは第三の月、すなわちシワンの月の二十三日であった。そして、すべてモルデカイが命じたとおりに、ユダヤ人と、太守、総督たち、およびインドからクシュまで百二十七州の首長たちに、詔書が書き送られた。各州にその文字で、各民族にはその言語で、ユダヤ人にはその文字と言語で書き送られた。」

ペルシャ帝国は東はインドから西はエチオピアまで、非常に広い領土を支配していたことで、二つの事情が発生します。一つ目は、いろいろな民族がいたので使われている言語もたくさんあった。共通の言語という訳にいかないのです。書記官たちがそれぞれの言語に翻訳して法令を書いて、誰もが読めるようにいたします。

3) 早馬で送った

二つの目の事情。広い領土の地域の違いで、法令が届いていたり届いていなかったりという違いが起きたら、それだけで混乱する原因になります。重要な文書であればあるほど一斉に送り届けなければなりません。自分たちは根絶やしにされてしまうと恐怖の中に置かれているユダヤ人に一刻も早く、救いの知らせをもたらすために、モルデカイは、この書簡を御用馬の早馬に乗る急使に託して送ります。

2 命を守るため

1) 厳しい内容に見えるが

それはどんな内容であったか。11節。「その中で王は、どの町にいるユダヤ人たちにも、自分のいのちを守るために集まって、自分たちを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、虐殺し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪うことを許した。」

これを読んでどう思われるでしょうか。いくら自分たちを守るためとは言え、これは行き過ぎではないか。神は、子どもや女性を平気で皆殺しにするのか。そんな疑問を持つかもしれません。

そのことを考えるために、ではハマンはどんな法令を出していたのか。比べてみます。3章13節後

半。「それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。」

先ほども触れたように、王の指輪で印が押された法令は、王でさえも取り消すことができません。仮に取り消そうとするなら、先に出した法令よりもさらに強い内容の法令を新たに出すしかない。モルデカイが出した法令とハマンが出した法令を比べてください。別にモルデカイが残酷なのではないのです。ハマンの法令を無効にするためには、それよりも強い内容のものを書かなければならない。だからどうしても厳しくなってしまう。では、全部が全部厳しいのかというと、よく見ると違いがある。ハマンは「若い者も年寄りも、子どもも女もすべてのユダヤ人」と書いて無条件に虐殺するとした。けれどもモルデカイは、「もしも自分たちを襲う者たちがいれば」という条件をつけている。ユダヤ人を襲う意志がなければ、その人たちは安全であるときちんと区別している。一見厳しいように見えながら、ハマンの法令とはまったく違うことをわかっていただきたい。

2) 「自分はユダヤ人である」

こうしてハマンの出した法令は事実上無効となり、むしろユダヤ人が優位に立つような法令ができたのを知って、ユダヤ人は歓喜の声をあげて喜び、祝宴を張り、祝いの日としました。死の恐怖から解放されたのですからお祭り騒ぎです。おもしろいのは、そうするとこういう人たちも出て来た。17節後半。「この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した。それはユダヤ人への恐れが彼らに下ったからである。」

新たに出された法令により、ユダヤ人でない者はユダヤ人の敵とみなされ、復讐される可能性が出て来たのです。以前から仲良くしていた人たちは別として、ユダヤ人と仲が悪かった人たちは急に恐ろしくなり、自分はユダヤ人であると自称する者まで現れたということなのでしょう。いずれにせよ、モルデカイが出した詔書は、ユダヤ人だけでなく国中の人々に大きな影響を与えたことがこれでわかります。

3 救い

1) たとえ死んだとしても

このような喜びの日を迎えることができたのは、振り返ればエステルが、「死ななければなら

ないのでしたら死にます」と告白して、献身的が働きをしたおかげであることは確かです。しかし、もう少しさかのぼればエステルを説得したモルデカイのことばが大きな鍵を握っているように思います。

4章14節に目を留めます。「もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

注目することが二つあります。まず一つ目。エステルがもし自分だけが生き延びればよいと考えて、何もしなかったなら、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。モルデカイはそうのように語っています。これを別の表現をすれば、エステルがここで行動を起こすなら、あなたもあなたの父の家も救われると、言い直すことができる。しかし、エステルが王の前に出れば殺されるかもしれないのです。実際にはそうならず済みましたが、もし殺されていたならどうなったのでしょうか。日本が戦争をしていたとき、国のために命を献げることは、まるで桜の花びらが散るように非常に美しいことで、最期は靖国神社に祭られるのだ教えていました。

エステルも同じように、美しく死んでいきます、ということなのか。まったく違います。あなたがもし死ぬ覚悟で行動を起こすなら、あなたとあなたの父の家は救われる。ということは、神は死んだ者を起こして新しいいのちを与えてくださると、モルデカイは信じていたことになり、エステルもそう信じた。そういうことになります。

2) 神の救いの備え

次に二つ目。なぜエステルでなければならなかったのか。「別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう」と言っているのだから、エステルでなくてもよいのではないか。これも違う。そこはやはりエステルなのです。というのは、数多くいた女性のなかから、なぜエステルが選ばれて王妃に召されていったのか、そのことについてモルデカイはずっと考えていた。それで彼は二つ目のこととして次のように語った。「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

エステル以外のほかの誰か、ではないのです。というのは、これまでの一連の事を見るなら、神はエステルの人生にずっと以前から関わり続けてい

てくださっていたとしか考えられないからです。ユダヤ人が迫害にあうずっと以前からそのようにしてくださった。母マリアが選ばれたように、エステルも神のみわざのために選ばれます。

3) イエス・キリストの救いの知らせ

エステルを通して働いてくださる神の御救いの姿から、イエス・キリスト浮かび上がってきます。エステルが「死ななければならないのでしたら死にます」と覚悟して王の前に出て行きました。この方も十字架でいのちをお捨てになる覚悟をされながら苦しみの道を歩みまれます。エステルは幸いにして死ぬことはありませんでしたが、この方は十字架で殺されました。それを見て、ある人は日本人の信じる美しい死の方に重ねて、こう言うかもしれない。「人のためにいのち潔く捨てるとは、すばらしい。」間違いではないかもしれませんが、でもそれでは大切なことが抜け落ちてしまっている。美しく死んでそれで終わりではなかったのです。墓に納められて三日目によみがえられました。そのようにして、本当に神は死んだ者をも救ってくださるのだと私たちに示してくださった。これこそが神が私たちに与えてくださる本当の救いなのだとしてくださった。もし人々が、この救いの本当の意味が分かったら、あのユダヤ人たちのように、お祭り騒ぎになるでしょう。この救いの知らせはどのようにして伝えられたのでしょうか。あらゆる言語に訳され、御用車の早馬に乗る急使に託されました。どんな民族でも、どんな言語を語っていようとも、すべての人にこの救いが与えられているのだから、一刻も早くこの救いにあずかりなさい。そのように神が私たちに語りかけてくださっています。